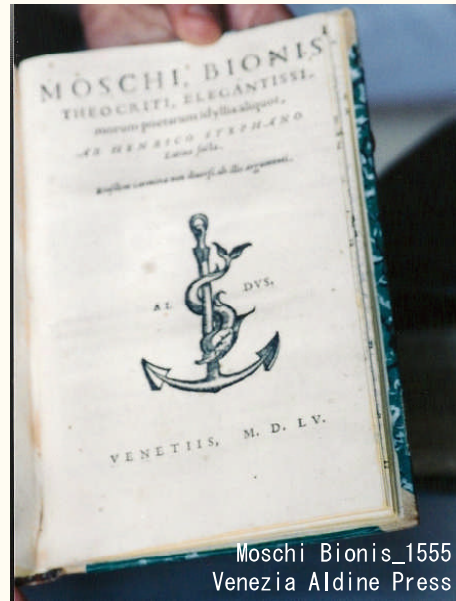


モンテフィアスコーネ・プロジェクト

能津充希子

2015年はアルド・マヌツィオ(注1)没後500年にあたる。イルカと碇の美しい商標は彼の印刷所から生まれた書籍に誇らしく刻まれている。そんな蔵書を多く持つ幸運な図書館に関わったことがある。



Moschi Bionis_1555 Venezia Aldine Press

1997年8月、イタリア、ローマ近郊のモンテフィアスコーネ、中世の書籍に関するプロジェクト(注2)に参加した。

湖を見下ろす小高い街は小さな教会の鐘が刻を告げる、のどかな田舎である。ローマからヴィテルボへは鉄道、その後長距離バスでそこへ着いた。

今は寂れた印象の街であるが、14世紀頃にはアビニョンからローマへの行程の要所であり、15世紀から17世紀にはファルネーゼ家の封建領地であった。1686年には枢機卿となったベネチア貴族のマルカントニオ・バルバリーゴがこの地の司教となり、彼はその主教区の神父たちのための大規模な神学校を創立した。セミナリオ・バルバリーゴ、それは街の頂にある。

神学校の貴重な特長である図書館は1692～3年創立当初の300冊あまりの蔵書に、アルド・マヌツィオの出版社への投資家であった(バルバリーゴ家)祖先のコレクション、他の図書館蔵書から移管されたコレクションや、ヘブライ語、他言語の書籍、神学、教会法書籍、地理や科学など世俗研究書などを加え、後に5000冊を数えるに至った。

近年、教育に必要な蔵書は別の場所に移動され、オリジナルのフレスコ画が残る壁面に備え付けの書架はそのコレクションとともに、長い間利用されないまま放置されていた。

しかも、階上からの水漏れが何度か発生し、壁面のダメージ、カビが発生。ほかにも問題を抱える図書館の救済を依頼された書籍修復家が各分野の専門家達に呼びかけ、図書館救済プロジェクトが始まった。プロジェクトは専門家向セミナーを兼ねて、毎夏開催されている。講師は中世書籍の専門家たち、フィレンツェの水書書籍救済に関わった伝説の修復家を含む豪華な顔ぶれ、そして敏腕のアシスタントたち、であった。

参加者はイギリス、アメリカ、カナダ、イタリア、ドイツ、ギリシャ、日本からの10名ほど。

私たちはそこで中世ヤルネサンス、現代を行き来する不思議な夏を過ごした。



破損した革装本

プロジェクトは中世以降の書籍に関するセミナーと図書館蔵書の状態調査や保存活動から構成されていた。

セミナーでは中世の顔料の再現、中世の本の構造(現在の様子からオリジナルの状態や資料の使用頻度を推察するなどにいたる)、記録の取り方、羊皮紙の扱い方などを学んだ。大学の授業と違うのは現物を前にしての現役修復家たちによる指導であった点が最も大きい。なんとか記録しよう、物言わぬオブジェクトに語りせようという気迫を感じた。

本の構造を知る、どのように動くのか、どこに負担がかかるのか、綴じ直しの際、元の綴じ穴を利用すべきか、今後の考えられるダメージは?などの点を考察することは重要な作業である。考察が済んだら、それらをなんとかしなくてはならない。必要最低限で必要十分な処置が理想である。理想であり、制限である。余計なことをしてはいけない。作業の記録をすべて残す。後の世代に責任を持って引き継がなくてはならない。

コレクションを収めた図書館は神学校らしい迫りに満ちていた。が、重大な欠陥が学生上りの私にも見て取れた。換気が良すぎる。大きな窓は閉めても隙間がある。外光がガラス越しとはいえ、数百歳の蔵書に降り注いでいる。書棚自体の様子がおかしい。扉が鶏小屋のような針金の網状である。つまり、埃が入り放題である。書棚で小動物の死体が発見されたい。防塵マスク、手袋、もしかすると破傷風の予防接種が必要なレベルである。

当時の写真資料を見て改めて思った。

これは書架ではなく、檻である。鶏小屋、という印象はあながち間違っていない。ネズミがいただけでなく、鳥の卵まであったら



Biblioteca del Seminario Barbarigo

しいが、これら蔵書自体、実は動物である。革装だからではなく、それは彼らの皮膚である。

さておき、私たちはイタリア16～18世紀の記録文書(羊皮紙装)の整理、クリーニングや、展示のための書見台作りを手伝った。蔵書はゴージャスであるが、作業は本当に地道である。

様々な案があるが、私が学んだ工房では革装書籍を修復するとき、可能な場合、革の鞣し直しをする。乾いて癖がつき、繊維の連結が弱くなった状態なら、その構造にうるおいを与え、繊維の強度を復元する。水没したり、火災にあった羊皮紙は洗浄、加湿他により状態の回復を図る。死のような深い眠りについていた書籍が現代の空気を吸い始める。

セミナリオ・バルバリーゴの蔵書は理想的とは言えない環境をなんとか生き延びた。今後はもう少し居心地の良い環境で安眠を続けられそうである。モンテフィアスコーネのプロジェクトは今年25年目を迎えた。

修道院、教会所蔵の古文書や記録文書はヨーロッパ中に存在する。デジタル資料で閲覧可能なものはあるが、やはり、現物とは違う。旅先で修道院、教会、貴族、地域所蔵コレクションのエキシビジョンに出会ったなら、どうか実物の迫力を感じていただきたい。それらは富の象徴、知の結晶、誇るべき文化、残すべき記録であっただけでなく、数世紀を生き延びているツワモノたちである。セミナリオ・バルバリーゴの蔵書のように檻の中で眠っていたかもしれない。ただものではなく、ただのモノではなく、いきものなのだと思う。チャンスがあればその誇らしげな様子を堪能していただきたい。

水害や虫害、小動物の物理的被害を免れた幸運な本も存在する。特に羊皮紙は最強の素材であり、適した環境下なら500年は優に健康な状態を保つ。保存状態の良い古文書に出会えたら、うっとりため息をついてほしい。もし、控えめに延命されたであろう古文書に気付いたら、その適切な処置を誇らしく感じていただければ幸いである。



16～18世紀アーカイブ

(注1) (Aldus Manutius, 1450-1515) イタリア、ヴェネチアに印刷所を開設。古典ギリシャ語、ラテン語文献の印刷により、ルネサンスへの貢献度大。イタリアック体活字を制作、印刷所のトレードマークはイルカと碇の図柄。

(注2) The Montefiascone conservation project <http://monteproject.co.uk/en/>

能津 充希子
武蔵野美術短期大学卒業、Palazzo Spinelli, Philobiblion, Camberwell College of Arts 他にて紙資料、書籍などの修復保存を学ぶ。
修復工房でのインターンを経て、2000年より紙資料書籍修復 Carta&Cuio 主催 個人蔵書、図書館蔵書の修復、保存箱作成に携わる。
現在は道新文化センターにて洋製本クラス指導中。